

## 特集 地域支援

# 「みんなのバス」

～区民の足として元気に市街地を走る

コミュニティバス～

株式会社 神戸マツダ

### ディーラーによる本格的なバス事業に

株式会社神戸マツダ（橋本 覚 代表取締役社長）は2020年12月から、兵庫県神戸市兵庫区において、小型バスを使用した地域交通の実証実験を開始し、2023年12月から本格運行に移行した。

神戸市では、地形の特性から横に貫く東西の公共交通機関は多いものの、南北を結ぶ交通機関が少なく、兵庫区民からも同様の声が寄せられていた。鉄道や路線バスなどが充実しているものと思われがちな都市部にあって、交通機関の空白地域があることに驚かされる。

同社は、この南北ルートの問題に着目し、同区における課題解決に向け、誰でも利用可能なことから「みんなのバス」と名付け、一般乗合バスとして運行している。

交通事業者ではない自動車ディーラーがバス事業の事業主体となって、本格運行を支援していく取組みは珍しく、全国のマツダ系ディーラーとしてのMaasへの参画では初となった。

「みんなのバス」の特長は、一般的な決まったルートを定時運行するサービス

で、もちろん「高齢者」や「区内在住者」といった制限はない。料金は一律大人230円、こども120円に設定されている。小さなコミュニティバスとして運行され、現在、JR兵庫駅前を起点に、北行きルート、南行きルートの全22の停留所を設置している。

年末年始も含め毎日運行しており、平日は2台体制で1時間に2本、休日は1



橋本 覚 社長

台体制で1時間に1本としている。なお、利用者的大幅増による車内の混雑緩和のため、10月1日から平日の午前は1時間に3本（20分間隔）に増便し、また停留所も1か所（下図中16番）新設している。利用実態は、利用者の約30%が70代、約17%が80代と、70代以上で半数近くに達しており、以降50代、60代と続く。利

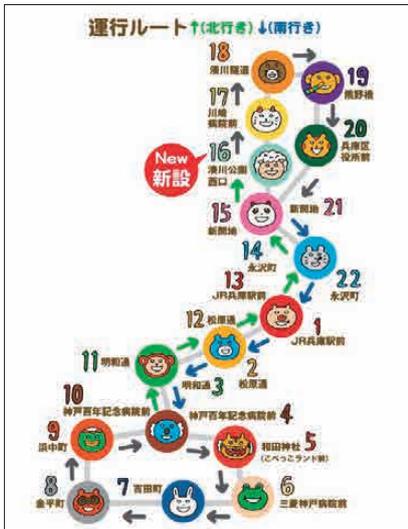


神戸市在住のイラストレーター、ザ・ロケット・ゴールド・スター（本名：山崎秀昭）さんが描いたキャラクターがデザインされ、遠くからでも分かりやすい「みんなのバス」



乗降時には、利用者同士が助け合うことも

用層の居住区では、8割が兵庫区内在住、2割が同区以外となっており、地域住民以外の利用も一定数見込めることが分かる。利用者の4割強が定期的に利用しており、「みんなのバス」が既に生活の中に組み込まれていると言えよう。利用目的は、「買い物」、「通院」が各々3割弱で、「職場／学校」、「区役所」が各2割強となつ



時刻表	平日	土曜	日曜	運行ルート
7	03			18
8	05	30	03	19
9	08	30	06	20
10	09	30	06	21
11	03	30	03	22
12	03	30	03	1
13	03	30	03	2
14	08	30	06	3
15	02	30	03	4
16	03	30	03	5
17	03	30	03	6
18	03	30	03	7
19	03			8



各停留所には、それぞれ動物のキャラクターが描かれており、ルート案内も含め小さな子どもでも判断できるようになっている

11枚綴りで1回分お得な回数券は、コープや病院等で取扱う



ている。その他銀行、郵便局、習い事、娯楽、友人・親族宅訪問、飲食と続く。特に北部住民は通院の利用が多く、南部住民は買い物や通院、区役所など幅広く利用されている。これは、北部のほうが商業地が近くにあり、徒歩や市バスで行きやすいためと考えられる。なお、兵庫区以外の利用者は、「職場／学校」への通勤・通学利用が中心となっている。

アンケート調査で利用者に「みんなのバス」の運行で便利になったことを聞いたところ、「病院や区役所の入り口近くにバス停がある」、「自宅近くにバス停がある」などドアtoドアの利便性が高く評価されている。その他、「今までよりも目的地に早く行けるようになった」、「今まで行きにくかった所に行けるよう

になった」、「今までよりも外出する機会が増えた」などのように、外出機会の創出効果に繋がったという声が多く寄せられた。

### 地域に協力する、地域に責任を持つ

橋本社長によると、同社は創業70周年の時（2011年）に、記念事業として



「みんなのバス」事業を統括する中込部長（左）と橋本社長（右）

コミュニティバスのようなものを運営できないかと検討したことがあったが、様々な規制をクリアしながら進めることは非常に難しいことが分かったため、断念した経緯があったという。

その後、全国平均よりも速いスピードで高齢化が進む兵庫区において、市バスの本数が削減されたり路線がカットされたりする現状から、移動困難な高齢者がいることを聞き、改めて交通支援を検討する中で、2020年のトヨタモビリティ基金の活用に着目した。

以前から地区の防火安全協会の会長など、幾つかの要職を引き受けていた橋本社長であったが、2019年8月、兵庫区役所新庁舎の「区民ホール」に緞帳（どんちょう）を新たに製作、贈呈したことをきっかけに、当時の小林区長との繋がりが始まったとのこと。

「当社は屋号に『神戸』が付いていますが、これは非常に重いことだと思っています。地域に貢献する、地域に責任を持つという意味で、『神戸』が付いていると考えており、『地元』に恩返しの意味でも地域貢献に取り組んでいきたいといった思いを当時の小林区長に話して

「いました」と  
橋本社長は振  
り返る。

そして、翌  
年に創業80年  
を迎える20  
20年、改め  
て、モビリテ  
イを通じた社  
会貢献への取  
組みを検討し  
ていた時、小  
林元区長から  
市バスの路線  
が減っていく  
中、区民の足  
となるバス事  
業の運営につ  
いて提案があ

り、一気に話が進んだという。

運行事業者には、みなと観光バス株  
式会社（松本 浩之 代表取締役社長）を  
選定し、同社を中心に様々な行政への手  
続きが進められ、無事スタートした。



神戸マツダが兵庫区役所新庁舎2Fの区民ホール「みなとがわホール」に寄贈した緞帳



同社の店舗では、「みんなのバス」のTシャツや停留所ごとのキャラクターをあしらった缶バッジなどのグッズを販売。様々なイベントでも販売し人気があるという（写真上・下）



### ドライバーは神戸マツダから派遣

「みんなのバス」のドライバーは、神  
戸マツダから派遣された社員。ディーラ  
ーで培ったお客様対応を心掛け、ホスピ  
タリテイの経験を發揮し、もちろん安心・  
安全な運転によりお客様を目的地まで確  
実にお届けしており、利用者への配慮、  
気遣いなどから、非常に高い評価を得て  
いる。

## 今後の課題

現在、都市部だからこそその課題に直面している。それは、公共交通機関同士の棲み分けといったことがあり、一例としては、市営地下鉄の近辺では、地下鉄が優先されるためコミュニティバスを走らせることはできないという事情がある。「お客様からの、『郊外の大手スーパーまで走らせて欲しい』といった要望に応えられないこともあり、事業者として歯がゆい思いもしています。

それでも地元自治会や婦人会の皆さんから強力なご支援をいただいております。様々なイベントを通じてご協力をいただくなどしており、『みんなのバス』の認知度の向上に貢献していただいております」と橋本社長。

実際に利用者は右肩上がりです。推移し、実証実験のスタート当初に定めた1日当たりの乗車人数200人という目標は約2年で達成。現在は平均230人で推移している。

## 社会全体で外出機会創出の仕組みを

運行事業者である「みなと観光バス株

式会社」の松本浩之社長にも話を伺った。

同社は2020年、神戸マツダから、トヨタモビリティ基金からの支援を前提に協力を求められた。同社では、社会実証実験であれば引き受けるが、本格運行は採算的には厳しいことを伝えたという。それは、区内が平坦地であり、市バス路線も走っていることから、南北の移動にどれだけのニーズがあるのか不明だったからだ。



松本 浩之 みなと観光バス 株式会社 社長

しかしながら、地元住民の方からは、「今後、さらに高齢化率が高まることは必至で、コミュニティバスの仕組みが必要になるため検討して欲しい」といった要望は多くあった。住民ニーズは、社内調査や兵庫区役所からの情報提供などをとくに、できるだけ多くの方に利用してもらうことを念頭に置きながら、ルート案を決めていった。

実証実験の申請手続きでは、近畿運輸局からの指導もあり、まずは貸切バス事業として申請を行った。貸切バス事業のメリットは、比較的容易に路線を変更できることにある。多くの意見を聞きながら、ニーズに沿った需要を探りながら路線を決定することができ、まさに理想的であったという。

なお、実証実験に向けては国土交通省、兵庫県、東灘警察署、神戸市建設局への行政手続きのほか、神戸市地域公共交通協議に参画のうえ、事業者、バス協会、タクシー協会など業界団体との調整もスムーズに進めることができたという。

松本社長によると、喫緊の課題である2024年問題に関しては、地方自治体が高齢者の方々の移動に際し、どのよう

な形の支援を考えていくのが重要だという。福祉の観点から考えると、外出機会を奪うことによって家に引きこもった結果、認知症が増え、結局、行政負担が増えてしまう。そのようなことから、松本社長は、「行政も神戸マツダの事例をもとに、コミュニティ交通に積極的に資金を投入し、拡充していくような、社会全体で外出機会を増やしていくような仕組みが必要ではないか」と話す。

### 公用車の代わりに利用し便利さを実感

神戸マツダという民間企業と兵庫区役所という行政が連携し、同事業が順調に進んでいることについて、古泉泰彦区長に話を伺った。

古泉区長によると、区で事業を行う際には、地域や企業と連携しながら区が主体となってイベント等を行い、企業からは協賛という形で支援してもらおうのが通例だが、「みんなのバス」は、神戸マツダが社会貢献活動の一環として主体となり、バスの運行事業を推進していることに非常に驚いたという。

山と海に挟まれ南北の移動が課題である神戸市で、兵庫区でも市バスのダイヤ

改正等で路線変更が行われ、不便になる地区も出ている。こうした状況の中、古泉区長は、「みんなのバスの運行は、地域の方々に非常に喜ばれており、私たちも公用車を使わずにみんなのバスを利用し、その便利さを実感しています」と話す。

「みんなのバス」の周知に当たっては、区の広報誌に随時掲載し、区内63万世帯配布。さらに、夏祭りなどのイベントで



古泉 泰彦 兵庫区長

は、神戸マツダの社員とともにPR活動を行い、波及効果が出ているという。元々兵庫区は下町で人情味があり、キヤッチフレーズは「やさしさ」と思いやりの町」。日頃から知らない人間同士でも助け合う習慣がある。古泉区長は、「乗車されている方も互いに声を掛け合ったり、運転手がひと言葉を掛けること等、素晴らしいこと。これからも一緒に盛り上げて参りたい」と期待する。

### 人々に寄り添い付加価値を提供

神戸マツダでは、「自動車総合サービス業」として従来の習慣による常識を捨て、発想の転換をしながら、社会的にも環境的にも「持続可能なバリューの連鎖」を提案し続けている。具体的には、「5つの幸せ」（お客様の幸せ、社会・環境の幸せ、地域の幸せ、パートナーの幸せ、社員とその家族の幸せ）というテーマを掲げて、その実現に向けた活動に取り組んでいる。

コミュニティバス事業は地域の幸せの一つの形であり、地元への恩返しとして、これからも地域の人々に寄り添いながら、付加価値を提供し続けていく。